

# 国語辞典における多義語の意味記述の比較

柏野和佳子 (国立国語研究所)

## 1. はじめに

複数の意味や用法をもつ多義語の理解は、計算機による言語処理において大きな課題の一つである。たとえば、情報検索や情報抽出などにおいて、語の多義性が支障になっており、多義性を解消して意味を特定するための手法の研究が進められてきている。そこで多義語の実態解明が必要になる。

本稿では、多義語の実態解明のために、市販の国語辞典における多義語の意味記述を調査し、意味区分の認定と構造化における観点の差異を考察する。使用した国語辞典を本稿で用いる略称とともに示すと、『岩国』：『岩波国語辞典』第六版(岩波書店)、『新明解』：『新明解国語辞典』第六版(三省堂)、『新選』：『新選国語辞典』第八版(小学館)、『明鏡』：『明鏡国語辞典』(大修館書店)、以上4冊である。

本報告は、動詞100語の調査結果に基づくものである。調査対象の100語は、『岩波国語辞典』第5版(岩波書店)の多義語に基づく意味タグが付与された『毎日新聞記事データ』(3,000記事)のテキストデータベース(新情報処理開発機構(RWCP))を利用し、そこから使用頻度の高い意味を含む上位のものより選定した。

## 2. 実態解明における問題点

多義語の実態解明において、多義における意味区分と構造とがどう定まるものであるのかという問題がある。具体的には次の3点が問題になる。

- ① 意味の違いがどの程度であれば、そこに意味的な区分を認め、多義ととらえるべきか
- ② その区分は、単一語の多義の区分とすべきか、同音異義語の区分とすべきか
- ③ 意味の似寄り具合によっていかに構造化が可能であるか

これらの問題に絶対的な解は求めにくいと言われている。たとえば国広(1997)では、①と②に関し、実際に、市販されている国語辞典どうしを比べると、区分する数や内容が一致しないことは多々あること、また、ある辞典では単一語の多義としてあるものが、別の辞典では、同音異義語の語義としてあることも珍しくはないことが指摘されている。

③の構造化に関しては、一般に、意味や用法を関連

の強さに基づいて階層的に記述するという方法が試みられている。この方法は意味や用法どうしの関係が「関連の強さ」で測られている。この「関連の強さ」という尺度はその基準を明確にしづらく、人によってどれくらいの関連の度合で階層化させるかの判断にゆれが生じやすいという問題がある。以上、3つの問題点に対し、本稿では具体例を通して分析する。

## 3. 国語辞典の構造化の比較

山田(2005)は『岩国』『明鏡』『新明解』3つの辞典を比較した上で、次のことを指摘している。「辞書における意味記述の態度は、中核的意味やさらに抽象的な一般的意味を求めようとするかどうかによって大きく異なる。これらを求めようとする場合には、用法群が少ない数になり、そうでない場合には用法群の数が大きくなる傾向がある。」そして、『取る』の意味区分として、『新明解』は8個の中核的意味をあげ、『岩国』は7個の中核的意味(各々には3個ないし8個の用法群が対応させてある)をあげ、『明鏡』は中核的意味をたてず、59個の用法群を列挙している、という差が認められることを示している。

そこで、動詞100語の各記述に対し、「階層」と「区分最大値」を求め、山田が指摘したような、辞典間の構造化の差異を定量的に確認することを試みた。まず、多義の「階層」数を出し、次に「階層別区分最大値」を出した。そして、「階層別区分最大値」の中での最大値を「区分最大値」とした。たとえば、「(1) (ア) (イ) , (2) (イ) (イ) (ウ) (エ) , (3)」という記述の場合は、(1)～の階層の下に、(ア)～という階層があるので、「階層」は2である。1階層目は(3)まで、2階層目は最大(エ)までであるので、「階層別区分最大値」は3,4になる。そして、この場合は、その3と4を比べ、大きい方の4が「最大区分値」になる。さらに、構造の詳細を把握するために、番号を列挙する「構造」表示<sup>2</sup>も試みた。

<sup>2</sup> ①見出し語直下に語義のみがある場合、語義番号は振られていなくても構造では1階層付与するが、階層数には反映しない。例：語義(ア)(イ)→階層:1, 構造:1(1,2) ②用例が無い場合「!」を付与する。例:(1)〈用例なし〉→! ③上位語義番号直後に下位語義番号がくる(すなわち積義なしの場合「\*」を付与する。例:(1)(ア)(イ)→1\*(1,2) ④!と\*とが両方立つ場合は\*のみ付与する。 ⑤見出し語直下に文法事項と用例のみ(例:動詞連用形+「て」を受けて～)の場合は1区分とは見なさない(当面の処置) ⑥語義が3つ以上の場合、1～3のように適宜省略するが、「!」等が付与される場合は省略を行わない。例:1～3, 4!, 5, 6\*(1, 2!), 7～9, 10, 11!

<sup>1</sup> 本研究は文科省の科研費、若手研究(B)(17720109)の助成を得た。

表 頻度順位の上位5語と《かける》の記述の比較

頻度順位	語	岩国			新明解			新選			明鏡		
		階層	階層別区分最大値	区分最大値									
1	する	2	8, 4	8	2	2, 4	4	2	3, 8	8	3	4, 11, 3	11
2	いる	2	3, 3	3	1	2	2	2	10, 3	10	3	2, 2, 5	5
3	なる	2	3, 3	3	2	3, 4	4	1	13	13	2	2, 15	15
4	ある	3	3, 3, 7	7	2	4, 5	5	2	13, 3	13	3	2, 18, 2	18
5	いう	2	3, 7	7	2	2, 3	3	2	2, 10	10	3	2, 6, 21	21
32	かける	3	5, 6	6	2	2, 7	7	3	3, 28, 4	28	2	2, 48	48
100語平均		1.8		3.7	1.4		3.6	1.6		5.9	1.4		10.0

調査結果の一部として、頻度順位の上位5語と、「区分最大値」が『明鏡』で最大であった《かける》<sup>3</sup>の結果、および、100語分の「階層」と「区分最大値」の平均とを表に示す。本調査により、各辞典がどの程度階層化しているのか、あるいは、どの程度フラットに列挙しているのかを明示させることができた。表にあげた一部分だけでも、『明鏡』の「区分最大値」の多さや、『岩国』のまとめあげる階層化が目につく。100語全般にわたってこの傾向は強く見られた。この傾向は何より、100語分の平均値によく現れている。なお、『新明解』が『岩国』寄り、『新選』は『明鏡』寄り、ということも本調査結果から判明した。

#### 4. 国語辞典の意味区分の比較

次に、《得る》と《進む》という2語の具体的な記述

例を通し、意味区分を詳細に比較、分析する。

##### 4.1. 《得る》の場合

はじめに、『岩国』の「中核的意味型」の記述に対し、『明鏡』の「用法群列挙型」の記述が顕著な例として、《得る》の1番目の区分を取り上げる。

###### 『岩国』

- (ア) 手に入れる。自分の物にする。「知識をえる」「志をえる」
- (イ) 理解する。さとる。「その意をえない」

###### 『明鏡』

- ①有益な物事を手に入れる。自分のものにする。獲得する。「優勝して賞金を一」「協力者を得て事業を始める」「収入を一」「書物から情報を一」「権利を一」
- ②好ましくない物事を身に受ける。「病を得て郷里に帰る」「罪を得て遠島の身となる」
- ③あることがきっかけとなって、力や想念・靈感などが与えられる。それを自分のものとする。「激励のこたばに力を

<sup>3</sup> 『岩国』と『明鏡』は「掛・懸・架・賭」で同一見出しであるが、『新明解』は「賭（懸）」を、『新選』は「賭」を別見出しにしている。

一]「成功に自信を得て次作に取りかかる」「撤退もやむなしとの結論を一」「解散は必至という感触を一」「靈感を得て詩作に興じる」

④相手から許諾や賛同などを受ける。「会長から許可を一」「貴兄の御了承を得て大慶に存じます」「スタッフの信頼を一」

《得る》はヲ格に様々な名詞をとる。その点に『明鏡』は着目し、ヲ格にくる名詞群を「有益なこと」「好ましくないこと」「力や想念・靈感など」「許諾や賛同」という観点で4分類して用法をとらえている。それに対し、『岩国』は、このようなヲ格の分類は、あくまでもヲ格の分類に過ぎず、《得る》そのものの意味が分かれるものではない、という立場かと思われる。しかしながら、『明鏡』には用例も多くあげられており、ヲ格で分類して用法を整理してとらえることにより、個々の用法がより理解しやすくなっていると言えるだろう。

しかしながら、用法の細区分や、用例提示はそう単純にはいかない。同じ《得る》の記述を通し、次に、用法区分、用例提示の困難さを指摘したい。

『岩国』では唯一、(7)に対し、(4)「理解する。さとする。」を分けているが、その(4)にあげている「その意をえない」という典型と思われる用例が『明鏡』で取り上げられていないため、その用法が『明鏡』の①～④のどこに該当するのが実ははっきりしない。③であろうか。

次に、『新選』の記述を引く。

#### 『新選』

①自分のものにする。手に入れる。

②とげる。「志を一」

『新選』では興味深いことに、②「とげる」を唯一①より分けているのだが、これは『岩国』の(7)に同一に分類された用例2例を区分する態度である。『岩国』が(4)として区別した用例は特別に取り上げず、明らかに記述態度の違いを見せている。また、この『新選』が区別にこだわった②の「志を一」という典型的と思われる用例がまた『明鏡』では取り上げられていない。これも『明鏡』では③であろうか。ちなみに、『新明解』では用例に注記を付与するという形で『岩国』と『新選』とがそれぞれにこだわった用法を明記するという記述態度をとっている。

#### 『新明解』<sup>4</sup>

(一) 自分の物にする(手に入れる)。「成案(勢い・力・教訓・承認)を一」/理解(支持)が得られる/時宜(当

を得た処置/所を一 [=その人の希望通りの(に ふさわしい) 仕事や地位につく] /病を一 [=病気にかかる] /志を一 [=所を得て、自分の抱負を実行することが出来る] /信頼(信任)を一 [=受ける] /真意を得たい [=ご承知いただきたい] /ご出席を一 [=出席していただく] ことが出来ましたことは…/その意を得ない [=意味がよく分からない]

以上、見たように、《得る》の場合、細区分を、それぞれの辞典が試みてはいるものの、辞典の数だけその記述が違っていた、というものであった。

## 4.2. 《進む》の場合

次に、『岩国』と『明鏡』とで区分数はほぼ同じであった《進む》を比較する。各記述は次のとおりである。

#### 『岩国』

(勢いに乗って)前へ出る。

(1) 自分が向かっている方向に動く。

(7) 前方へ行く。⇔退く・引く。「三步一」「転じて東へ一」

(4) 目標に向かって乗り出す。「芸能界に一」「理科系学科に一」

(9) 《「一・んで…する」の形で》自分から積極的に…する。

乗り気になって…する。「一・んで勉強する」

(5) 仕事がかどる。「工事が着着と一(=完成に向かう)」

(2) 標準・普通の動き方よりは早い。⇔遅れる。「時計が二分一」

(3) 度合が高まる。

(7) 物事の程度や内容がよくなる。⇔遅れる。「一・んだ技術」

(4) 地位・階級があがる。「官位が一」

(9) 勢いが増す。⇔衰える。「食が一」(食欲が盛んになる)「病勢が一」(病気が悪化する)

#### 『明鏡』

①前方に向かって移動する。前進する。「一步前へ一」「船が波をけたてて一」「未来[目標]に向かって一」

②上の段階・地位に移行する。上がる。「高校から大学へ一」「将棋の道に一」「課長から部長に一」「準決勝に一」

③物事が(計画した通りに)進行する。「仕事が予定通りに一」「工事が一」「筆が一」「大いに食が一」

④物事の状態・程度がはなはだしくなる。進行する。「過疎化[相互理解・世代交代・活字離れ]が一」「病状[近視]が一」

⑤(他に先んじて)物事が好ましい方向に動く。発展する。進歩する。「文明が一」「公害対策が他県より一步一・んでいる」「考え方が一・んでいる」

⑥《「気が一」の形で》積極的に…しようという気持ちになる。気乗りがする。下に打ち消しを伴うことが多い。「宮仕

<sup>4</sup> 『新明解』の記述には文型表示や並列の区切り表示が記されているが本稿では省く。また太字表記は本稿筆者によるものである。

えは気が一・まない」

⑦時計の針が正しい時刻より先のほうを指すようになる。

「この時計は五分一・んでいる」

⑧《「一・んで」の形で、副詞的に》みずから積極的に物事を行う。「一・んで事に当たる」「みずから一・んで応募する」

『岩国』は3個の中核的意味（1には4個、3には3個の用法群が対応）をあげ、『明鏡』は中核的意味をたてず、8個の用法群を列挙している。構造化には違いが見られるが、区分の合計数では1しか差がない。しかし、このように同様の区分数でも、個々の記述には異なる点がある。以下、問題としたい4点を順に指摘する。

まず、『明鏡』の1つの区分が、『岩国』の2つの区分にまたがっているように見えるところがある。それが『明鏡』の②である。『明鏡』②の4例のうちの2例、「課長から部長に一」「準決勝に一」は、『岩国』(3)(イ)「官位が一」の類例と見られるが、「将棋の道に一」は『岩国』の(1)(イ)に分類される「芸能界に一」「理科系学科に一」の類例ではないだろうか。『明鏡』②の「高校から大学へ」と『岩国』の(1)(イ)の「理科系学科に一」が同じ分類になるものであるのか異なる分類になるものであるのかは、意見が分かるところかと思われる。「高校から大学へ」は、段階が上がることに着目すれば、そのまま「課長から部長に一」などの類例となるが、「大学へ」というところを「理科系学科に」と同様、「目標に向かって乗り出す」ととらえることも可能であろう。

次に、『明鏡』と『岩国』と、積義を読む限り、区分は対応しているものの、用例が異なる区分に分類されている箇所がある。それは、『明鏡』③と④、『岩国』(1)(エ)と(3)(ウ)である。『岩国』(3)(ウ)で、「食が一」と「病勢が一」は同じ分類である。ところが、『明鏡』では「大いに食が一」は③に、「病状〔近視〕が一」は④にと、別分類になっている。筆者の直感では『岩国』の分類が妥当に思えるが、試みに筆者以外の人に意見を求めると、『明鏡』の分類が妥当に思える、との意見もあった。ちなみに、『岩国』「病勢が一」「工事が着着と一(=完成に向かう)」と、『明鏡』「病状〔近視〕が一」「工事が一」は対応がとれており、そこに問題はない。ここで問題なのは「食が進む」をどうとらえたか、という点にある。「食が進む」を「食欲が増進している」ととらえれば『岩国』の分類になる。一方、「食が進む」を、お皿が次々に空になっていくプロセス進行ととらえれば『明鏡』の分類になる。

異なる点の3つ目は、『明鏡』⑦と『岩国』(2)の時計に関する積義の幅の違いである。『岩国』が広く、『明

鏡』は限定的な記述になっている。実際にその意味・用法に限られたものである場合は限定的な記述のほうにより事柄がはっきりして有効であろう。しかし、それに類する別の用例が存在する場合、扱えなくなってしまう。たとえば、予定より早く運動会のプログラムが進行しているような場合、「プログラムが進んでいる」と言うのではないだろうか。これは『明鏡』⑦や『岩国』(2)の時計の例と同じ区分になる例ではないだろうか。そういえばこれら例の追加分類を受け入れやすい『岩国』の積義が妥当にみえる。ただ、たとえば、プログラムの用例は時計の比喩表現である、と見たとしよう。そうであれば、時計に限定した語釈のところにプログラムの用例も分類が可能であり、本義をはっきり示すことが重要であると考えれば『明鏡』の記述が妥当だと言えよう。

そもそも、比喩表現の用例は、柏野(2006)でも取り上げたように、程度によって本義の用例に連続して扱われる場合と、独立した区分をたて、別に扱われる場合とがある。《進む》にもそのような箇所がある。『明鏡』①の「未来〔目標〕に向かって一」は本義の用例と連続して扱われているが、『岩国』の(1)(イ)は、その『明鏡』の用例と同じ「目標に向かって」という語句を用いた積義の独立した区分が立っているのである。このように、比喩表現の扱いは辞典によってゆれがでるところである。

## 5. おわりに

辞書を用いる目的や好みによって望ましい辞書記述は変わってくるため、あらゆる要求を満たす記述は実現困難であろうが、用途に応じた方法論の構築は、言語処理、言語理解のために必要である。そのためには、さまざまな辞書記述の方法とその効果の分析が有効と考えられる。そこで本稿では、意味区分の認定と構造化に着目して、複数の国語辞典における多義語の記述の差異を分析した。

### 〔謝辞〕

調査を補助してくださったアルバイトの立花幸子さん、研究補佐員の西部みちるさんに感謝いたします。

### 〔参考文献〕

- 国広哲弥(1997)『理想の国語辞典』大修館書店。  
山田進(2005)“辞書の意味記述”レキシコンフォーラム, No. 1, ひつじ書房, pp. 47-63.  
柏野和佳子(2006)“国語辞典の積義と用例の検討”言語処理学会第12回年次大会発表論文集, pp. 8-11.